

# 東田遺跡発掘調査見学会



No. 1 完掘状況（西から）

平成 21（2009）年 7 月 18 日（土）

財団法人東広島市教育文化振興事業団  
東 広 島 市 教 育 委 員 会

## はじめに

東田遺跡は、高屋町郷に所在する弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡です。

auの基地局地局工事にともなって、6月から7月半ばまでの予定で発掘調査を実施しています。

この遺跡は、谷が入り組み低丘陵が広がる郷地区の中でも、標高250mほどの付近で最も高い丘陵に位置しています。調査した場所は東南に面した丘陵の緩やかな斜面で、標高は240～244m、面積は約270m<sup>2</sup>です。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡3～4棟、古墳時代の段状遺構と掘立柱建物跡、そして平安時代後期の大型の掘立柱建物跡の一部が見つかりました。

調査した面積は小さいですが、遺構の密度は高く、ほぼ全域から遺構が見つかりました。

高屋町の郷から杵原、高屋堀にかけての丘陵上には、これまでも数多くの遺跡が高い密度で分布していることが知られています。発掘調査も西本遺跡群、浄福寺遺跡群など大規模に行なわれてきました。その結果、高屋地域では、約2000年前の弥生時代中期頃から人口が増え始め、弥生時代後期にピークを迎えていたことがわかってきました。

東田遺跡は、位置的にそれらの遺跡の中心に近い部分に所在しており、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての代表的な遺跡の一つといえるでしょう。

古墳時代前期には、隣接する丘陵に市指定史跡仙人塚古墳が築造されます。また、郷地区の南部白鳥山には、やはり古墳時代前期の白鳥古墳が築造され、出土品は県指定重要文化財に指定されています。

このよう古墳時代に入ってもこの地域は高屋の中心的位置を占めていたことがわかりますが、このことは飛鳥時代においても同様だったらしく、大島と杵原の境付近にあった西本6号遺跡では飛鳥時代の神殿跡が見つかりました。

平安時代にはこの地域は賀茂郡高屋郷と呼ばれますが、この頃の高屋の様子は明らかではありません。平安時代末期の12世紀後半には朝廷の役所のひとつ、大炊寮の経費を負担する便補保とされ、高屋保と呼ばれるようになります。

鎌倉時代以降、郷・溝口地区では溝口4号遺跡などを中心とする勢力と高屋堀・高屋東地区に新たに移ってきた地頭の平賀氏が、高屋の支配をめぐる争っていたようですが、最終的に平賀氏が高屋をはじめ、周辺地域にまで勢力を伸ばし、安芸国でも有数の領主へと成長します。

このたびの発掘調査は、不明な点が多い平安時代の高屋郷の様子の一端が明らかになる貴重な発見がありました。それでは次に、見つかった遺構や遺物について詳しく見ていくことにしましょう。



東田遺跡周辺遺跡地図(1:25000)

- |                 |             |             |              |              |
|-----------------|-------------|-------------|--------------|--------------|
| 1. 東田遺跡         | 2. 郷1号遺跡    | 3. 高屋東2号遺跡  | 4. 高屋東3号遺跡   | 5. 仙人塚古墳     |
| 6. 福岡山古墳群       | 7. 森信第1号古墳  | 8. 森信第10号古墳 | 9. 中郷窯跡      | 10. 蔵田1号遺跡   |
| 11. 天神遺跡        | 12. 浄福寺1号遺跡 | 13. 浄福寺2号遺跡 | 14. 胡麻4号遺跡   | 15. 槇ヶ坪3号遺跡  |
| 16. 新住西遺跡群      | 17. 杵原2号遺跡  | 18. 西本1号遺跡  | 19. 西本2号遺跡   | 20. 西本3・4号遺跡 |
| 21. 西本5号遺跡      | 22. 西本6号遺跡  | 23. 原の谷遺跡   | 24. 鍵向山第1号古墳 | 25. 鍵向山第2号古墳 |
| 26. 木原向山第1~3号古墳 | 27. 溝口1号遺跡  | 28. 溝口2号遺跡  | 29. 溝口3号遺跡   | 30. 溝口4号遺跡   |
| 31. 原田岡山古墳群     | 32. 別所古墓群   | 33. 宮領1号遺跡  | 34. 白鳥古墳     |              |

## 1 弥生時代の遺構

### 竪穴住居跡

#### No. 2

調査区の中央付近で見つかった竪穴住居跡です。南東側が斜面に位置していたために土が流出し、無くなっています。平面形はほぼ円形で、深さは約 70 cm です。土層の観察の他に柱穴の位置から 2 回の建て替えが行なわれていることがわかりました。1 回目は直径約 6.2m, 2 回目は直径約 7m の住居が建てられていました。いずれも 7~8 本の柱が立っていたと考えられます。遺物は弥生土器の甕や壺、砥石などが出土しています。

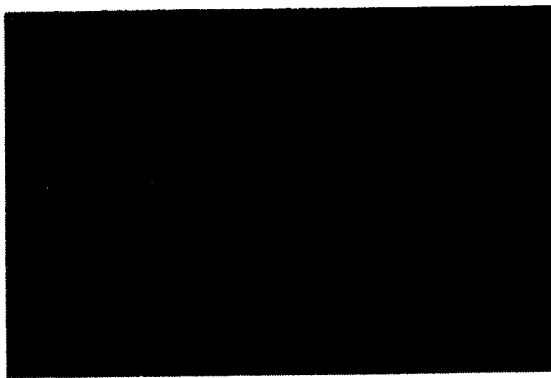
#### No.16

No.2 から約 5m 東で見つかった竪穴住居跡です。そのほとんどが調査区の外になっているため、詳しい規模はわかりません。見つかった部分から推定すると平面形は円形で、直径約 6m, 深さ約 80cm の住居になります。床は「貼り床」と呼ばれる、土や粘土を固く叩き締めて平らにする方法で仕上げられています。遺物は弥生土器の他に柳葉型の鉄鏃<sup>やないば</sup>が出土しています。

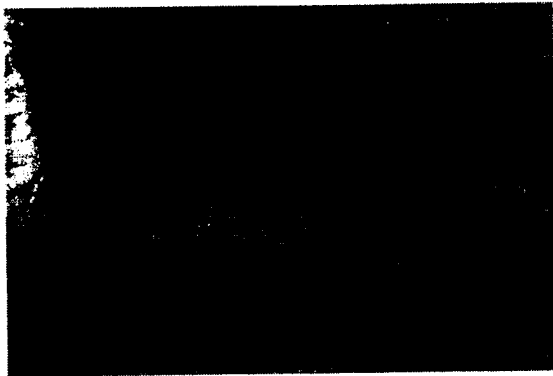
#### No.17

No.2 から約 1.5m 南で見つかった竪穴住居跡です。東側は No.3 を建てる際に削られています。調査では 4 分の 1 ほどが見つかりました。平面形は円形で、推定の直径は約 6.4m, 深さは約 80 cm です。遺物は弥生土器が出土しています。

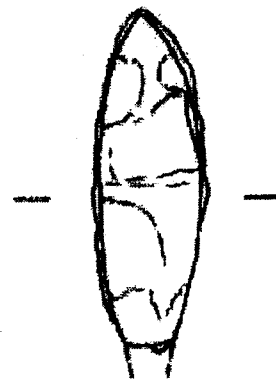
3 軒とも出土遺物から弥生時代後期（約 1900 年前）に建てられたと考えられます。



No. 2 完掘状況（南西から）



No.17 完掘状況（東から）



No.16 出土鉄鏃 S=1:1

## 2 古墳時代の遺構

### 段状遺構

#### No. 1

古墳時代の遺構としては、No. 1 の段状遺構が挙げられます。

No. 1 は、北から南に向かって緩やかに傾斜する斜面を東西約 16 m、南北約 6 m にわたって、ほぼ平坦にした造成面で、北側に溝を巡らせています。西側は調査区の外に広がっていると考えられますので、さらに広い面積の造成面だったようです。

平坦面上には数多くの柱穴が掘られています。平面プランを復元できるものは現時点では 1 棟のみですが、数棟の掘立柱建物が建っていたことが推測できます。おおよそ、1 間 × 1 間ないしは 1 間 × 2 間の小規模なものだったと考えられます。

北側の溝の状況から、3～4 時期に分けて造成が行なわれたことが窺えます。結果として現在のような広さになっていますが、それぞれの時期には 1～2 棟の建物だったと推測できます。

性格については明らかにできませんが、他の調査例では、工房として利用された事例が報告されています。

出土遺物は、西側を中心におびただしい弥生土器・土師器が出土しています。時期は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけてのものがほとんどなので、この No. 1 段状遺構も弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて利用されたものでしょう。

出土した土器の中には山陰系土器と呼ばれる鳥取・島根県地方で出土する型式の土器も含まれており、何らかの交流があったことが窺えます。



### 3 平安時代以降の遺構

#### 掘立柱建物跡

No. 3

基壇状の土壇，土壇を囲む溝，建物の敷地を造成した背面の崖面，そして柱穴によって構成されています。

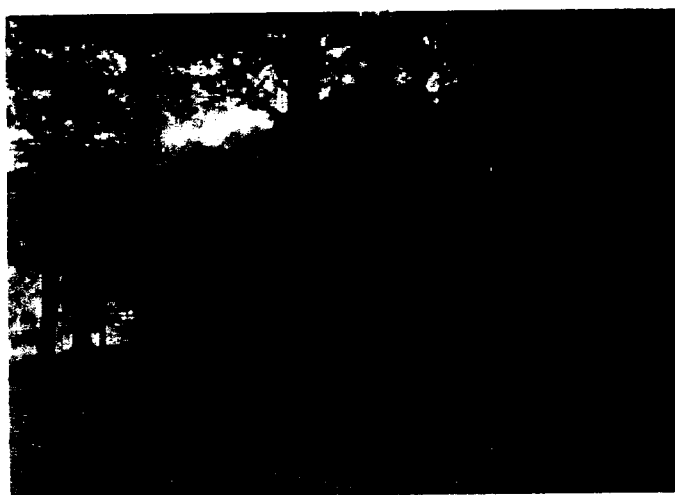
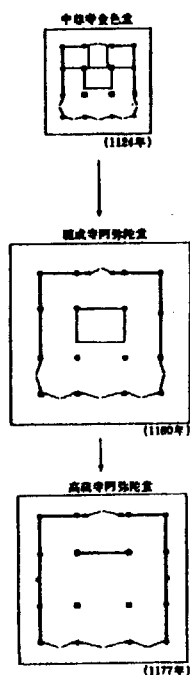
建物跡は，最後列の柱穴が4基全と，その前面側2基が見つかりました。その配置には大きな特徴があります。

中の1間が柱間の長さ約3.2mと広く，両端の柱間が2.4mとやや狭くなっています。尺貫法でいえば，両端が8尺，中央が1丈となります。このように中央が広い柱間を持つ建物は社寺建築以外になく，特に方三間の阿弥陀堂建築に見られる形式です。確認のため，前面側にも試掘溝を掘ったところ，推定される位置に柱穴が見つかったため，三間四方の阿弥陀堂建築であることが確認できました。

この堂跡の規模は，柱穴の中心から中心の長さで8.1m×8.1mあり，面積で65㎡あまりの規模の大きなものです。

建物の背後は高さ約1.5mの急傾斜となっており，敷地を広げるために斜面を切り込んだものと思われます。

建物跡の周辺からは，須恵器の椀，皿，坏，甕，土師器の皿，坏，のほか，布目瓦の破片も1点ですが出土しています。また，鉄釘も出土しています。須恵器から，11世紀頃に中心を持つ遺構と考えられます。



高蔵寺阿弥陀堂

『平安建築』『日本の美術』より

阿弥陀堂平面型式変遷図

『平安建築』『日本の美術』より

## 土墳墓

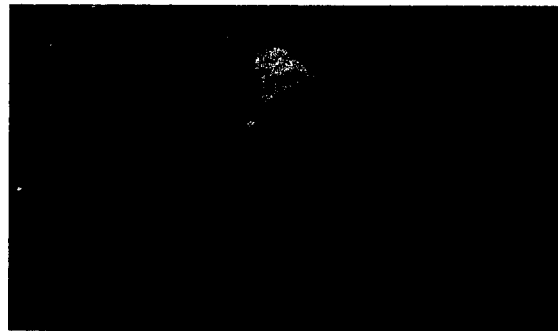
### No. 1 4

No. 3 の建物跡の北東隅の柱穴の上に掘りこまれた土墳墓です。平面形態は 1.3m×0.8m の楕円形で深さは約 0.5m でした。土墳内は、周囲に石を乱雑に並べ、中央に蓋をするように 3 枚ほどの平石を並べていました。土墳の上には墓標と思われる平石を立てていたようですが、検出したときには倒れていました。出土遺物は見つかっていません。

### No. 5 3

No. 3 の建物跡の最後列から 2 番目の列の西端の柱穴の上に掘り込まれた土墳墓です。地表からすぐの浅いところで見つかったことから、平面プランは明らかではありません。火葬骨と思われる人骨が少量と短刀が出土しています。

土器等は見つかっておらず、時期は不明です。



## 4 発掘調査の成果

今回の調査の結果、東田遺跡では竪穴住居跡 3 棟、段状遺構 1、掘立柱建物跡 1、土墳墓 2 のほか、土坑、溝状遺構、多数の柱穴が見つかりました。ここでは、その成果の一部をまとめてみましょう。

まず、弥生時代から古墳時代にかけての遺構、遺物の中で注目すべきなのは鉄鏃の存在です。弥生時代後期初頭という時期は、中国地方で見つかる鉄器としては早いほうです。

東田遺跡では石器は遺構外から出土した石鏃 1 点のみで、すでに石器が使われなくなっている状況を示していると思われます。

東田遺跡で見つかった鉄鏃は柳葉形と呼ばれるもので、身の長さ 5 cm の大型品です。当時の弓は丸木弓といってハゼやマユミの手ごろな太さの丸木を削っただけのもので、後世の弓と違って弾力が弱く、飛距離が短いのが特徴です。そのような弓で大型の鉄鏃を装着した矢を使うためには至近距離から射なければなりません。そのような理由から、これらの鉄鏃は対人用武器として使用されていたと考えられるのです。

たった 1 点の鉄鏃ですが、当時の人々が置かれた緊迫した状況の証言者といえることができるでしょう。

今回の調査の最大の成果は平安時代後期の掘立柱建物跡が見つかったことです。柱穴の配置から平安時代後期から末期にかけて浄土信仰の高まりとともに、全国で盛んに建立された阿弥陀堂建築の遺構と考えられます。浄土信仰は浄土教ともいい、阿弥陀仏の本願を信じて極楽浄土に往生し、そこで悟りを得ようとする教えと実践のことです。

わが国では、比叡山の天台浄土教がそのはじまりとされ、円仁が848年に比叡山に常

行三昧堂ぎょうざんまいどうを建てて不斷念仏ふだんねんぶつを行なったのが起源とされています。その後、良源やその弟子の源信らが現れ、貴族の間に信仰が広まっていきました。そうした中、摂関時代から院政期にかけて、信仰の拠点として阿弥陀如来をまつる阿弥陀堂が建立されるようになります。

西方浄土におられる阿弥陀如来をまつるため堂は東に面して建てられ、方一間の母屋もやの周囲に庇ひさしをめぐらせた、いわゆる「一間四面堂いっけんしめんどう」形式で、屋根は宝形造ほうぎょうづくりとし、中央に阿弥陀如来像を安置し、仏壇の背後に來迎壁らいごうへきを設けるのを通常とします。現在も各地に当時の遺構が現存しており、中尊寺金色堂（岩手）、願成寺阿弥陀堂（福島）、高蔵寺阿弥陀堂（宮城）、法界寺阿弥陀堂（京都）、金蓮寺阿弥陀堂（愛知）、富貴寺大堂（大分）などが代表的なものです。建立者は、摂関家、上皇や院の近臣などの貴族のほか、地方の豪族武士にも及んでいます。

さて、東田遺跡の建物跡ですが、通常礎石建物とするところを掘立柱建物としています。これは、建築技術や経費の面が影響したと思われる、略式といえるかもしれません。

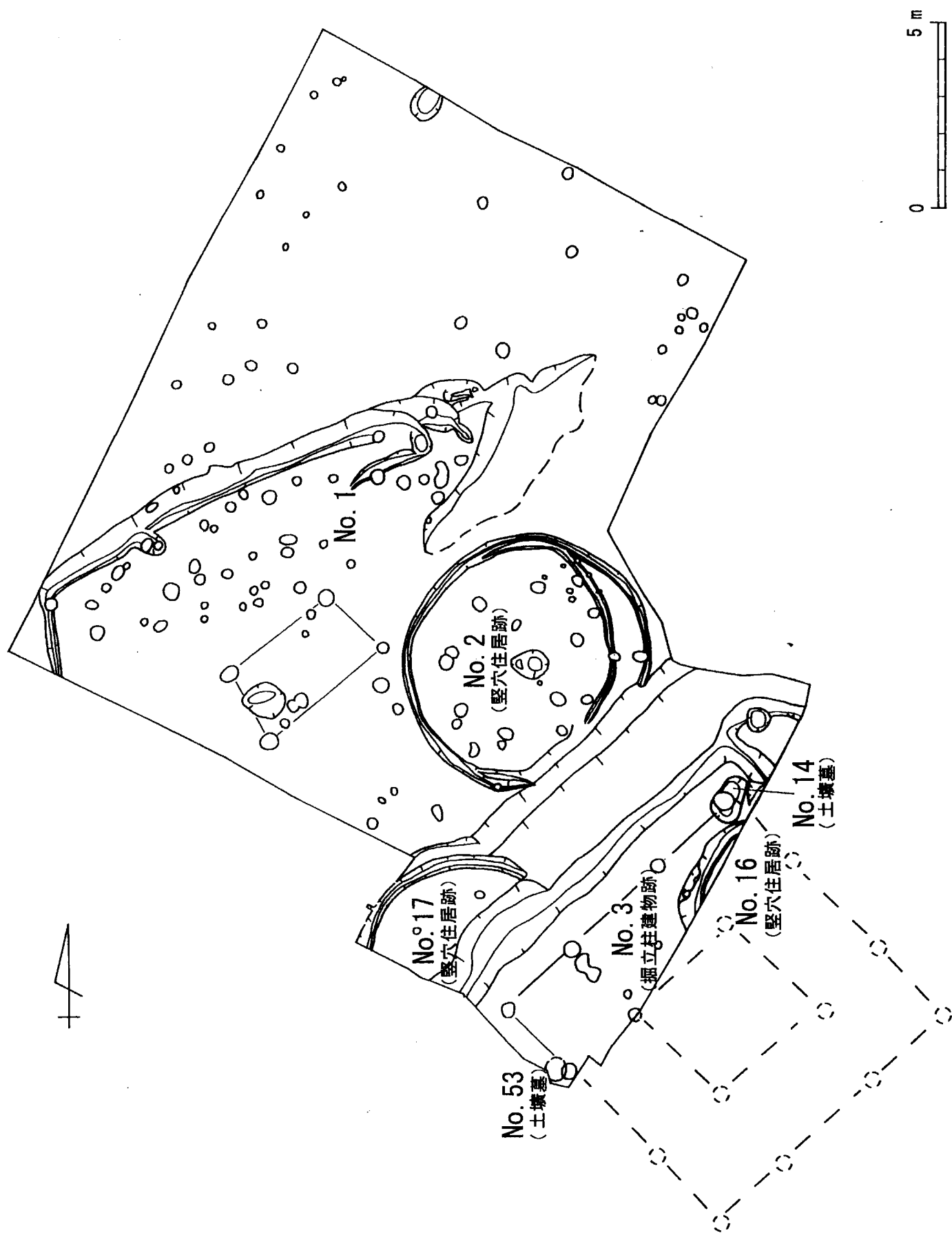
柱が残っていないため、正確な大きさはわかりませんが、柱穴の中央間の距離で正面の長さが8.1mあり、奥行きも同規模と考えられることから、約65㎡あったと推測されます。この大きさは、阿弥陀堂としては規模の大きなほうに属します。瓦の出土が非常に少ないことから瓦の使用は一部に限られていたと思われますが、外観は都の阿弥陀堂に引けを取らない立派なものだったのでしょう。

今回の調査では、No.3の建物跡以外の建物跡は見つかっていませんが、周囲には関連の施設があったことが推測できます。

また、阿弥陀堂という建物が極楽往生を求める人たちによって建てられていたという事実も重要です。ある意味非常に個人的な寺院建築ともいえるため、この建物を建てた人物なり一族なりがこの周辺を本拠地としていたことは疑いえません。当時、高屋を支配し、中央貴族ともつながりのある豪族が東田遺跡周辺にいたことで、高屋郷の名を冠する「郷」という村名になったのかもしれません。

この建物跡周辺からは、12～13世紀の遺物は出土していないことから、平安時代末期までには建物が廃絶したことが窺えます。柱穴の上から見つかった2基の土壇墓は時期が不明ですが、あるいは建物があつた時の記憶が残っているうちだからこそ、阿弥陀如来の救いを求めて建物跡に墓を作ったことも考えられます。そうであれば、廃絶からそう時間が隔たっていない平安末～鎌倉時代初めにかけての墓だったのではないのでしょうか。

東田遺跡の掘立柱建物跡は、阿弥陀堂跡と考えられることから、高屋地域への浄土信仰の伝播とその時期を窺わせる良好な資料となりました。不明な点が多い地方の平安時代の様子を窺う上でも今回の発掘調査の持つ意義は小さくないといえるでしょう。



東田遺跡 遺構配置図 (1/100)